

山本ひろこの想い

～目黒区長選挙へ挑戦するにあたって～

平和都市・広島で生まれ育ち、大学入学を期に上京。東山小出身の夫と結婚してから目黒区に住んでいます。もともとは政治に必ずしも興味関心が高かったわけではありませんが、ITエンジニアとして必死で働いている中で、3人の娘が生まれ、社会貢献をしたいと思うようになりました。保育園入所率ワースト1の目黒区で、4年連続の保活に苦しんだ体験を機に政治行政を学び、区議会議員に立候補。未来を担う子どもたちにつけを回すことのないよう、あたらしい技術や工夫で、区民にも財政にもやさしい目黒区にするべく、ずっと闘ってきました。

区議2期目を迎えた2019年、監査委員を拝命して区内各施設を回り、施設の老朽化で苦しむ学校現場の現状を目の当たりにしました。区内の大半の学校が築50年を超える中で、些細な手直しで先生たちの手間が大幅に取られたり、不便や危険な状況でも使用を継続せざるを得なかったりしています。学校現場が抱えている困難は、これ以上先送りにできる状況ではありません。それなのに、目黒区は学校の老朽化にどう対応するかを決めることさえできずにいます。

さらには、2018年に目黒区で起こった痛ましい女児虐待死事件は日本中から大きな注目を浴び、私自身も目黒区に住む母親として、区議会議員として、痛恨の思いで迅速な対応の必要性を強く訴えましたが、今の目黒区長は児童相談所開設に向けた積極的な動きを起こそうともしていません。保育園の待機児童解消についても、需要予測ミスと後手後手の対応により本格対応があまりにも遅すぎましたし、学童保育クラブは、定員の倍の子どもたちを受け入れたために異常な過密状態となり、第二のおうちと呼べるような家庭的な環境どころか、安全管理で手一杯です。2005年に都内で初めて制定された「目黒区子ども条例」では、子どもが利用しやすい施設の運営や居場所づくり、虐待やいじめなど子どもの権利侵害の予防が謳われています。全国に先駆けて子ども条例を制定したにも関わらず、目黒区の子どもの育成環境は特段充実しておらず、条例がないがしろにされています。

昨年秋の台風 15 号・19 号の災害時には、防災無線がまったく聞こえない中、近隣区からは携帯のエリアメールが鳴り続けるのに、目黒区では一切発信されず、区民は情報不足で不安と混乱に陥りました。住民の命を守る自治体としての責任が欠如しているがゆえに、住民視点の安全・安心のための情報提供に欠けているのではないのでしょうか。

本来、東京でも有数のブランド力を誇るはずの目黒区は、4 期 16 年の多選で居座り続ける区長のリーダーシップの欠如で、政策判断のスピードが遅すぎて、「特徴がない」「魅力に欠ける」街に成り下がってしまっています。女性人口が多く、多才な住民が住んでいるにもかかわらず、それらを活かした特徴のある取り組みはありません。また、長期的な財政計画が適切に行われなかったせいで、数年前には緊急財政対策と称して短期間で一気に 180 億円もの事業カットを行い、ギリギリまで人員も削減しました。この 16 年で役所も地域の施設も学校も疲弊しています。このままだと私たちの目黒区はいったいどうなってしまうのでしょうか。

あたらしい目黒区は、あたらしい目黒区長でつくる。

幅広い層の住民との対話をもとに、オープンで未来志向のワクワクする個性的な地域社会を、そして、子どもも高齢者も障害者も、誰ひとり取り残さずに共に学び支え合う、文化の香り豊かでやさしい目黒区をつくっていきませんか？

そして、立憲主義や民主主義という普遍的な価値観を大切にしつつ、多様な人が共感しあえる社会へとシフトしていく。すべての人に居場所がある、あたらしい目黒区をつくりあげていきませんか？

あなたと一緒に、あたらしい目黒区へ。

山本ひろこは、この春の目黒区長選挙に挑戦します。

2020 年 2 月 19 日

山本ひろこ